

アイランダー高校生サミット2025開催報告 全国の二〇〇の離島高校から五九人が参加

本誌編集部

八つのテーマについて 九グループに分かれて議論

日本離島センターでは、包括連携協定を締結している大正大学（東京都豊島区）と共同で、二〇二五年一二月二一日（日）に「アイランダー高校生サミット2025（以下、サミット）」を開催しました。サミットは、全国の離島に住む高校生をオンラインで結び、お互いの島の魅力や課題について意見交換を行ないながら、地域課題の解決や島を盛り上げるためのプロジェクトなどを企画するものです。また「離島」という#（ハッシュタグ）でつながる仲間たちとの交流を通じて、自分の島の良さを再発見し、地域への感謝とともに

に郷土愛を醸成することも意図しています。

二〇二三年度に始まり、今回で三回目を迎えるサミットは「潮の音鳴らせ 我らの離島くしまの高校生、一〇〇人会議」をテーマに、全国九都道県の二〇校から集まった離島高校生五人が、離島の魅力や島ならではの悩みなどを共有しながら、地域おこしにつながる事業計画やソリューションなどについて、活発に話し合いました。

参加者たちは、メンター役となる大正大学の学生とともに、「文化」「仕事」「イベント」「観光」「生き物」「食」①・②「生活」「学校・教育」の主題ごとに九つのグループに分かれて、現状や課題、共通点や違いなどを議論。最後

に各グループで企画した島を盛り上げるための事業計画を発表しました。

個性あふれるプロジェクトの数々

「仕事」グループは、「農業や漁業などの第一次産業が中心で繁閑差が大きい

参加高校一覧

北海道礼文高校、北海道奥尻高校◎、東京都立新島高校◎、同小笠原高校、新潟県立佐渡総合高校◎、広島県立大崎海星高校◎、同広島観智学園高校◎、島根県立隠岐島前高校◎、愛媛県立弓削高校◎、長崎県立壱岐高校◎、同対馬高校、同北松西高校、同上五島高校◎、同奈留高校◎、同五島海陽高校◎、鹿児島県立種子島高校、同徳之島高校◎、同与論高校◎、沖縄県立久米島高校、角川ドワンゴ学園N高校※

◎実行委員のいる高校
※通信制に通う離島高校生



北海道から沖縄県まで全国20校から59人の離島高校生が参加。

「本土と比較して仕事の選択肢に限りがある」「少子高齢化による担い手不足」などの離島の現状に着目。これらの課題を解決し、多地域居住や複業の実践を含めた理想の働き方/生き方を実現する仕組みづくりとして「島転勤システム(島めぐりワーク)」の構築を考案しました。これは、通年雇用や期間を限定した就業など人手不足に悩む島の事業者と、離島で働きたいと希望する人をウェブサイトなどでマッチングさせるものです。いろいろな島への転勤やさまざまな業務を組み合わせることで、島の課題解決と合わせて、関係人口の創出などにも貢献できるとのプレゼンに、「人手不足の悩みを解消でき、離島の産業だけでなく伝統文化なども守れるのでは」「複数の島で多様な仕事を体験することで、自分に合った島や仕事を見つけれられる」などの感想があげられました。

「学校・教育」グループは、「ER

(Education Revolution) 学園」という学校を設立し、離島から学校教育に革命を起こそう! と提案。島の学校の「少人数のため学習指導が手厚い」「一人ひとりの活躍の場が設けられている」「地域との交流機会が多い」といったメリットを最大限に活かし、島外との交流が限られる、私塾がなく授業の補完や学力の向上が難しいなどの課題を新技術で解消することで、「最小規模かつ最先端の地域密着型教育」を実現したいとの発表に、「マンツーマンで手厚い授業を受けられ、進路や自己実現の探究にも力を入れられる」「オンラインを利用することで島内外の方々と交流できる」など多くのコメントが寄せられました。

このほかにも「#離島」という共通項を持つ高校生たちだからこそ提案できる個性あふれるプレゼンが相次ぎました。「5W1H(いつ・どこで・誰が・何を・なぜ・どのように)」を共通ルール

★島転勤システム(島めぐりワーク)

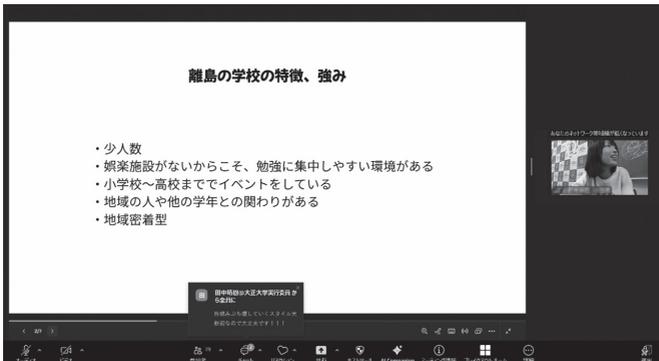
～たった一度の人生、いろんな島でいろんな職を体験してみませんか～

○ターゲット

「離島で働きたい人(若者・移住希望者・学生・フリーランスなど)
人手不足に悩む離島の事業者(漁業・観光・農業・宿泊業など)」

○内容

「離島の人材不足や産業の季節変動を解消し、働く人が
「島を転々としながら経験を積める」新しい働き方を実現する。
定住ではなく“循環型関係人口”を増やし、地域の多様な文化と経済をつなぐ。」



人手不足の解消と関係人口の創出を両立させる「島転勤システム(島めぐりワーク)」をプレゼンする「仕事」グループ。

「学校・教育」グループは、離島の学校のメリットを活かし、「最小規模かつ最先端の地域密着型学校を作ろう」と提案。

多く、全体の満足度も平均四・三(五満点)と高いものでした。

じつは、サミットのプログラム作成や広報活動、全般的な企画・運営は、第一回から離島の高校生と大正大学生による実行委員が担っています。今回

他の島の高校生との交流を評価

として、各グループがプロジェクトを企画しているので、具体的かつ非常に実現性の高い発表もあり、今後の高校生たちの活躍を期待させるものばかりでした。

サミットの終了後に実施したアンケートでは、「島あるあるなどで話すことができ、交流を深められる良い経験となった」「島の課題について考えることは難しかったが、他の参加者の意見を聞き、自分の思考を深めていくのは楽しかった」「自分の島のことを考える良い機会になった」など、サミットの参加をプラスにとらえる感想が多く、



当日は大正大学の学生がメンターとして各グループの議論をサポートした。

も一人の高校生、五人の大学生の計一六人の実行委員が全体のマネジメントを行ないました（実行委員名簿など詳細は本誌二八三号参照※）。

実行委員を務めた大正大学の高本汐音^{おん}さんは、「みんなと一緒にアイラン

ダー高校生サミットを作れて、とても幸せでした。学びや楽しさいっぱいの毎日でした。本当にありがとう」と、感謝の言葉を口にしました。

高校生実行委員たちも「サミットで一緒にのグループになった参加者たちと、想像以上に盛り上がって、サミット終了後もオンライン交流が続きました。実際にオフで会えた子もいて、とても良い出会いになりました」（田中楓夏^{ふうか}さん、弓削高校）、「第一回目のサミットから参加し、二回目・三回目は実行委員として関わりました。サミットを通して、さまざまな経験ができて本当に良かったです。進学で島を離れても委員の仲間たちとのつながりを大切にしたいと思います」（泉和穂^{なほ}さん、五島海陽高校）など、サミットに対する思いを語りました。

二〇二六年度も開催予定

本財団では、島に対する愛郷心を育

み、将来の島づくりを担う人材の育成に向け、二〇二六年度も「アイランダー高校生サミット」を開催する計画です。開催時期などは未定ですが、今回と同様に離島の高校生と大学生による実行委員会を組織し、学生・生徒たちが主体的にサミットの企画・運営を担う形で進めていく予定です。

詳細は適宜、主催者のウェブサイトなどでお知らせしていきますので、サミットに関心のある離島の高校生、親御様、教育関係者の皆様は、ぜひお気軽にお問い合わせください。サミットに実行委員として関わりたい！という離島高校生の立候補もお待ちしております。

（森田）

※



アイランダー高校生サミットに関する
ご相談・お問い合わせ
（公財）日本離島センター
03-3591-1151（森田）